NO.306　SDGs を前提としたイベント企画

村上研究室（建築・住居分野）　A22AB012　伊藤愛菜

1.はじめに

1-1 SDGs について

SDGs とは、Sustainable Development Goals(持続可能な開発目標)の略称で、あらゆる貧困に終止符を打つことが世界規模の課題であり、2030 年までに世界が達成すべき 17 の目標と 169 のターゲットのことである。

1-2 企画内容・目的

(1)企画の目的：SDGs の目標の中で「8.働きがいも経済成長も」「11.住み続けられるまちづくりを」「12.つくる責任、つかう責任」を軸におき、四つの企画を行う。各企画を通してまちづくりや環境づくりを目的とする。

(2)企画内容：単一の企画を一からプロデュースするのではなく各企画において特定の役割を分担しながら取り組む。「秋田建築ワークショップ」（期間：9 月 2 日～9 月 6 日）「写真展・Minimum↔Maximum」（期間：9 月 12 日～9 月 19 日）「なごや建築まつり」（期間：11 月 13 日～11 月 16 日）「南知多活性化プロジェクト」（期間：2 月まで）

2. 秋田建築ワークショップ

2-1 実施概要

秋田県男鹿市にて大学生による国際建築ワークショップ。古民家と商店街の再生案を考える。

日時：9 月 2 日～9 月 6 日

場所：秋田県男鹿市

2-2 実施目的

地域活性化の促進に加え、国境を越えた大学生間の交流を通じて、街および地域住民との持続的なつながりを形成することを目的とした。

2-3 役割と SDGs とのつながり

本企画において筆者は、最終発表会の市民向け広報を目的としたポスター制作(図表 1)および学生間の連携を担った。また、本取り組みは地域住民に向けた最終発表会の実施および周知を通じて、学生と地域の交流を促し、地域コミュニティの活性化に寄与する点で、SDGs 目標「11.住み続けられるまちづくりを」に該当する。また、ポスター制作や情報発信において必要な情報を社会へ届けることを重視した点は成果物の責任ある生産と活用を意識した取り組みであり「12.つくる責任、つかう責任」との関連性を有する。

2-4 ワークショップの様子(図表 2)

ワークショップは、二日目より対象敷地のリサーチおよび設計作業を開始し、三日目の午後に中間発表を実施した。その後、五日目に最終発表会を行った。

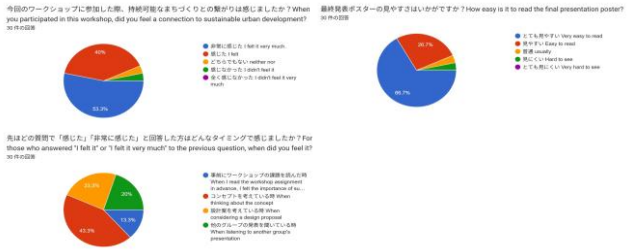
2-6 アンケート(図表 3)

ワークショップは合計 8 グループ、55 名が参加した。参加者にアンケート調査を実施し、55 名中 30 名から回答を得た。

2-7 企画の反省・評価

本企画の評価とて、地域住民に向けた最終発表会の実施や学生間の連携を通じて地域と学生の交流機会を創出できた点があげられる。特に市民向けに広報を行ったことは企画内容を地域に開く場を設けることにつながり、地域活性化の一助になったと考えられる。一方で参加者アンケートの回収率が約半数にとどまったことから、企画全体の評価を把握するためには、調査方法や回収体制の改善が必要である。

(図表 1:ポスター)　(図表 2:ワークショップの様子)



(図表 3:アンケート)

3. 写真展・Minimum↔Maximum

3-1 実施概要

新栄町にて Minimum↔Maximum というテーマで写真展を行った。

日時：9 月 12 日～9 月 19 日

場所：新栄ビル

3-2 役割と SDGs とのつながり

著者は会場の施工、広報活動および当日の来訪者対応を担当した。また、本取り組みでは、リサイクル可能な素材を用いて低予算で会場施工を行った点において持続可能性を意識した実施であり「12.つくる責任、つかう責任」

との関連性を有する。

3-3 当日の様子(図表 4)

初日は約 40 名の方が来場し、オープンパーティーにも多くの来場者が集まり賑わいを見せた。土日に多く来場者が訪れ、主に一人で来られる方が多く見受けられた。

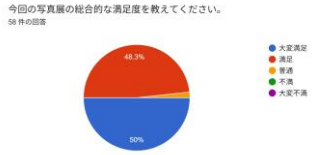
3-4 アンケート(図表 5)

写真展には全日程を通じて延べ約 100 名が来場した。会場入り口に来場者アンケートを設置し、58 名から回答を得た。

3-5 企画の反省・評価

招待客を中心に一定数の来場者を確保し、展示運営を円滑に実施できた。また、リサイクル可能な素材を用いた会場設営を行ったことは環境配慮を意識した展示として一定の意義を有する。一方で反省点として来場者の多くが招待客や関係者に限られ、通行中に立ち寄る一般来場者を十分に取り込むことができなかった点が課題としてあげられる。このことから、展示の存在を認知させる同線設計や通行者への認知促進を意識した広報手法が不十分であったと考えられる。今後は会場外からの視認性向上や、地域に開かれた広報戦略を検討する必要がある。

(図表 4:当日の様子)



(図表 5:アンケート)

4. なごや建築まつり

4-1 実施概要

名古屋市において通常は一般公開されていない魅力的な建築物を、期間限定で公開することを目的とした催し。

日時：11 月 13 日～11 月 16 日

場所：名古屋市

4-2 役割と SDGs とのつながり

著者はまち歩きマップ(図表 6)の作成および全体スケジュールとマップを掲載したリーフレット(図表 7)の制作を担当した。あわせて、スタンプラリーの実施に協力するとともに、担当研究室の建築物に関する見学案内および広報活動を行った。本取り組みは地域の建築資源を活用し、市民に対してまちの魅力を再発見する機会を提供する点において、SDGs 目標「11.住み続けられるまちづくりを」との関連性を有する。

4-3 当日の様子

13,15,16 日は淺沼組名古屋支店の見学ツアー、14 日は三の丸街歩きツアーを担当した。

4-4 企画の反省・評価

事前の広報が十分であったとは言えず、イベントの認知が限定的であったことが課題としてあげられる。その結果潜在的な参加者層に情報が十分に届かず来場者の拡大に繋がらなかった可能性がある。今後は広報開始時期の早期化や媒体の多様化を図り、より多くの方に情報が届くよう体制を整える必要がある。

(図表 6:まち歩きマップ)　(図表 7:リーフレット)

5. 南知多活性化プロジェクト

5-1 実施概要

南知多内海駅を中心に地域活性化のための活動を行う。

日時：2 月まで

場所：南知多内海

5-2 役割と SDGs とのつながり

著者は主に南知多地域の活性化を目的として SNS を活用した広報活動を担当している。また、この取り組みは SDGs 目標「8.働きがいも経済成長も」との関連性を有しており地域経済の発展と雇用創出を促進する点において意義を持つ。

5-3 企画の反省・評価

南知多地域の魅力や取り組みを発信する体制ができた点が評価としてあげられる。一方で現段階では SNS 上でのフォロワー数や投稿への反応が十分に伸びておらず今後は閲覧データの分析や投稿形式の工夫をする必要がある。

5. おわりに

本研究・実践では、SDGs を前提に地域活性化を目的とした複数の企画において広報や制作、運営支援を行った。一定の成果が得られた一方で広報面に課題が残った。今後は広報手法の改善と地域との持続的な関係構築を図ることでより持続可能な地域活動へと発展させることが求められる。